M-GTA 研究会　News Letter No.115

ニューズレターは、発表者の学びや SV のコメントを加えた研究の概要等を掲載したものです。
M-GTA に関する学習の素材となるものです。ご活用ください。

＜目　次＞

◇第 99 回定例研究会 …… 1
【第一報告】
木村 由美／統合失調症者家族がケアラーとして自分らしい生活を再構築するプロセス
1．発表の過程を通しての感想や学び …… 1
2．スーパーバイザーのコメント …… 3
3．研究概要 …… 4
【第二報告】
石井 あずさ／精神科訪問看護師による初回エピソード精神病者に対する服薬支援のプロセス
1．発表の過程を通しての感想や学び …… 8
2．スーパーバイザーのコメント …… 9
3．研究概要 ……10
【第三報告】
矢島 厚子／日本企業における海外派遣からの帰任者の組織再適応プロセスに関する研究
1．発表の過程を通しての感想や学び ……13
2．スーパーバイザーのコメント ……15
3．研究概要 ……15
【参加者の感想】 ……19
◇近況報告 ……19
◇次回のお知らせ ……19
◇編集後記 ……20

◇第 99 回定例研究会

【 日 時 】2023 年 10 月 11 日（土）
【 場 所 】大正大学 5 号館 551 教室／ハイブリット（対面及び Zoom 開催）

【第一報告】

木村 由美（国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科博士課程/獨協医科大学大学院看護学研究科研究生）
Yumi KIMURA ： Doctoral Program, of Health and Welfare Sciences, Graduate School of International University of Health and Welfare / Graduate School of Nursing, Dokkyo Medical University, Research

Student

統合失調症者家族がケアラーとして自分らしい生活を再構築するプロセス
The process by which families of individuals with schizophrenia reconstruct their way of life as caregivers.

1．発表の過程を通しての感想や学び

発表の機会を頂戴し、感謝申し上げます。発表までの SV 平塚先生とのやり取り、そして発表当日に会場の諸先生方からご教授いただいた経験は、本研究を深化させると共に研究者自身の M-GTA に対する興味関心が強化される機会となりました。平塚先生とのやり取りでは、常に思考の言語化を促して頂きました。それにより‘わかっているつもり’の自分に気づき、他者に伝わるよう丁寧に言語化していくことによって‘わかっている’自分に変化できたのではないかと考えています。この過程は、研究を自分のものとしつつ客観性を保つための重要なプロセスであったと感じています。また、平塚先生から SV の中で‘ならでは’と‘誰とのどのようなかかわりあい’なのかを常に問われ続けました。現象に見える‘ならでは’を意識することで、変化の背景にある統合失調症者の家族だからこそ語られたデータが見えてきたことは、研究者自身がデータに添うことを可能にしたのではないかと感じています。そして、‘誰とどのようなかかわりあい’があったのかは、まさに M-GTA で捉えようとしていた社会相互作用でしたが、当初の結果図からは相互作用が見えない部分もあり、あたかも研究協力者自身が独りで変化したような描きぶりになってしまったことに気付きました。データに立ち返れば、様々な相互作用が見えてきたことを考えると、研究者自身がうごきを捉えようとするあまり、そこにある相互作用を捉えきれなかった分析の未熟さにあったと考えています。

また、発表当日は様々な視点からのご意見を頂きました。特には、分析テーマおよび分析焦点者について有益なご意見をいただきました。この点は、SV での平塚先生からのご指摘でもありました。木下先生の総括において、分析テーマの設定では研究者自身の専門性からその分野で確立された既成の概念を使うと、概念自体の意味に影響され grounded-on-data の分析ではなくなってしまうといったお言葉を頂きました。本研究では分析テーマに「ケアラーとして」という文言を設定していたために、分析が歪められていたことは事実あったのではないかと考えています。さらにシンプルに設定することで、純粋な分析ができたように思います。分析焦点者も同様に、結果を誰に活用するのかをシンプルに検討し設定すること、それらのことは SV から検討を繰り返した内容であった為、深い理解に繋がりました。

M-GTA 研究会での発表は、初学者の研究者にとって言いようのない緊張感とプレッシャーを抱えて臨んだ発表会でしたが、研究者の意図を丁寧に確認し汲み取りながら専門的知見から多くのご意見を下さった長山先生、回収資料にブラッシュアップのための多くのヒントとご意見を記載してくださり、発表後にも丁寧にアドバイスくださった林先生からのご意見は本研究に多くの示唆を得ることが出来ました。林先生からの「ここからここに変化するまでにもっと何かあったのでは？それこそが、この理論を活用する時にご家族が本当に知りたいことなんじゃない？」というお言葉は、研究者にとって目から鱗のお言葉であり、これが実践モデルを臨床で活用するということなのかと、M-GTA で生成する実践モデルの現実味を感じました。また、発表中に林先生が大きく頷きながら聴いてくださっているお姿が見え、安堵感に包まれながら発表出来たことも感謝しています。

最後に、SV をお引き受けくださった平塚先生には、発表準備から発表、発表後の確認に至るまで本当に様々なことをご教授頂きました。この研究がなぜ M-GTA じゃなければいけなかったのか？の問いには、

研究者の本研究に取り組むまでの長い経過を確認してくださり、研究者のリサーチクエスチョンに、それは M-GTA じゃないと出来ないこと、そこに大きな意味があるというお言葉を頂いた時は本当に嬉しく、前向きな気持で発表に臨めました。お忙しい中、多くの時間を費やして頂き本当に感謝しております。今回の SV の過程および研究会での発表経験は、今後も M-GTA での研究を継続していこうと考える研究者にとって財産となりました。今後も学びと理解を深めていきたいと考えています。

2. スーパーバイザーのコメント

平塚 克洋（昭和大学 保健医療学部看護学科）

木村さんは、非常に長い期間、精神疾患をもつ患者の家族会に研究者として参加してきたご経験があり、家族を単なる「支援を欲する人」としてではなく、社会的相互作用の中で自らの生活を再構築することができる「本来的な力をもつ人」と捉えておられました。この経験が、本研究のリサーチクエッションの原点であり、M-GTA での分析を志して大学院に進まれたきっかけとお聞きしました。大学院では、M-GTA の卓越した研究者である小嶋章吾先生に指導を受けており、SV としてどのようなサポートができるか不安もありましたが、木村さんの真摯な研究姿勢に触発され、非常に建設的なやりとりができたと確信しています。

SV を引き受けるに当たって、木村さんの M-GTA に関する理解をお聞きすると共に、「なぜ M-GTA でならなければいけないのか（M-GTA に適した研究という問いとは異なる）」を伺いました。木村さんは、非常によく勉強されており、明確な答えをいただいて、SV をスタートすることはできました。約 3 週間の SV では、主にディスカッションを重ねた、1）結果に現れる「ならでは感」について、発表会での木下先生のコメントを受けて改めて考えた 2）分析テーマの設定とgrounded-on-data であること、について、報告します。

1）結果に現れる「ならでは感」

木村さんは、SV 開始当初より、「統合失調症者家族がケアラーとして自分らしい生活を再構築するプロセス」という明確な分析テーマを持っており、結果図、ストーリーラインまで完成した状態でした。私からは、専門分野外ではありましたが、結果に「ならでは感」が見えず、家族の生々しい体験を含むデータが充分に反映されていない点を指摘させていただきました。原因の一つには、ネーミングの難しさがあり、整った概念名をつけようとする過程で、データがもつインパクトやパワフルさが消えてしまっていたことがありました。もう一つは、すでに「自分らしい生活を再構築」して、家族会を運営しているような参加者からお話を聞いたこと、木村さん自身、非常に長いプロセス全体の動きに意識を向け過ぎていたことが原因にあったことと考えています。研究の性質上、過去の体験を振り返って語っていただくことは多いのですが、研究者はその時々の参加者の生々しい体験を引き出し、その時々の分析焦点者の視点に立って、概念生成をする必要があります。

これらの点を指摘すると、木村さんはご自身で深く内省され、短い期間で非常にインパクトがある概念を生成し直して来られました。その際、なぜそのように概念が変化するのか、そこに誰とどのような社会的相互作用があったのか、という追加質問にも見事に対応してくれました。概念生成のエッセンスがこれらのやりとりには詰まっており、結果を再点検する際にも非常に有益だと思います。

2）分析テーマの設定と grounded-on-data であること

木村さんの分析テーマである、「統合失調症者家族がケアラーとして自分らしい生活を再構築するプロセス」には、SV の中で何度か質問を投げかけました。主には「ケアラーとして」なのか「自分自身、あるい

は自分そのもの」のらしさ、どちらなのか、「ケアラー」は、他者からの見え方で、家族自身は「ケアラーとして」という意識はないのではないか、という質問でした。木村さんも迷いながら、なぜ「ケアラーとして」という言葉を入れたのか、この研究で当初から捉えたいと考えていたことは何であったかを振り返りながら説明してくださいました。そこにケアラーという役割、他者から見た役割期待が無意識に組み込まれていたようにも思いましたが、本研究でのケアラーの定義に立ち戻って、テーマを設定しました。

発表会の最後に、木下康仁先生より、「分析テーマの絞り込みの段階で、データをみていく角度が『限定』されてしまっている。」というコメントをいただきました。これは、明確な分析テーマの設定が、grounded-on-data ではなく、研究者（SV も含め）の固執になってしまっていたことへのご指摘であったと思います。もちろん、分析テーマは先に設定され、明確であるべきと思いますが、データと向き合う中で、修正され、データにフィットしたものになっていくということなのだと思います。

明確な研究疑問、そこからの分析テーマの設定と、豊かなデータ、データに自由に語ってもらいながら理論を生成すること、このバランスと grounded-on-data の分析の面白さについては、SV である自分も含め、木村さんや多くの会員の皆さんの気づきに繋がったと思います。

最後に

研究や自身の疑問に真摯に向き合う木村さんとのやりとりは、SV である私にも多くの気づきや学びをもたらせてくれるものでした。木村さんの今後の更なる飛躍を祈念いたします。

3. 研究の概要

1) 研究の背景

わが国の統合失調症者は約 80 万人[1)]と決して珍しくない病気である。しかし、慢性化しやすい点や陽性症状のような他者には理解しがたい症状、症状に伴う生活障害により、精神障害者の地域移行が進む中で、統合失調症者の地域生活継続を支える家族、特に主介護者となる家族成員（以下、ケアラー）の存在は欠かせない。近年は当事者と共にケアラーも支援を必要とするケアの対象者とされている。しかし、ケアラーの介護疲労や精神的負担[2、3、4)]が報告されるなど、ケアラーの生活実態は必要なケアが提供された生活とは言い難い。研究者がフィールドワークを続ける家族会では、日々の統合失調症者(以下、当事者)との生活について様々なエピソードが語られている。その中で、統合失調症の発症以降、当事者と四六時中行動を共にするために仕事を辞めた人、精神保健福祉の充実を求め一家で引っ越しをした人、当事者が通う作業所に一緒に通い作業が終わるまで傍で付き添う人、といったように当事者中心へとこれまでの生活を一変させることを余儀なくされていた。一方で、徐々に対応できるという感覚を持ち自分主体として生き生きと暮らすメンバーの姿が散見され、趣味を楽しみながらケアラーとしての生活を自分らしく再構築していく姿が確かにあった。この家族会メンバーにみる自分らしさを発揮しながら暮らすケアラーの姿にこそ、ケアラー支援の示唆があると考える。家族成員の統合失調症の発症により介護者役割を担う家族は、これまで構築してきた生活を変化させており、この変化に対していかに対応し新たな生活を再構築してきたのか、そのプロセスを解き明かす必要がある。

2) 研究目的

統合失調症者家族がケアラーとして自分らしい生活を再構築するプロセスを明らかにする

3) 用語の定義

(1) 自分らしい生活

本研究における自分らしい生活を、ケアラーが「外的なものにより意思決定がなされるものではなく、他者からの影響を受けながらも自分自身の意思や気持ちに基づいて状況判断し行動を自分で選択する」と呼ぶにふさわしい日々の暮らしの営みと定義した。

＊前調査として実施した家族会フィールドワークとインタビュー・関連文献より定義づけた

(2) ケアラー

本研究におけるケアラーを、統合失調症者の主介護者として無償で介護、日常生活上の世話や援助を提供する家族成員とする。なお、本研究では、当事者との同居の有無は問わない。理由として、統合失調症という慢性疾患の特性から当事者の住居は病状により変化することがある。ケアラーは同居の有無にかかわらず、当事者の生活維持のために援助している点から、必ずしも同居でなくともケアラーとして繋がりを維持していることが伺え、同居は問わない。[5、6、7、8、9)]

4) M-GTA に適した研究であるか [10、11)]

(1) 健康問題や生活問題を抱えた人々に専門的に援助を提供するヒューマン・サービス領域であることについて、本研究は、統合失調症者を主介護者としてケアする家族は、統合失調症の症状に苦悩しながら介護負担感を抱えて生活しており専門的支援を必要とする存在であることからヒューマンケア・サービス領域の研究である。

(2) サービスが行為として提供され、利用者も行為で反応する直接的やりとり（社会的相互作用）のレベルを扱うことについて、統合失調症者の主介護者を担う家族は、ケアラーとして当事者へのケア生活の中で、当事者との直接的なやり取りや、他の精神障害者家族、医療福祉関連の人々とのやり取りなど相互作用の中でケアラーとして存在している。

(3) 現実に問題となっている現象で、研究結果がその解決や改善に向けて実践的に活用されることが期待されていることについて、ケアラー自身がケアラーとして自分らしい生活を再構築していけることを支援するために活用できる研究である。

(4) 研究対象自体がプロセス的特性をもっていることについて、統合失調症者家族がケアラーとして当事者と一心同体の関係性を持ち当事者中心の生活から、自己尊重でき自分らしい生活を再構築していくプロセス性を有している。

*上記が、M-GTA に関連する書籍を参考に本研究が適しているか否かの根拠である。しかし、本研究は研究者の研究疑問と実践的に活用できるケアラー支援を求めた結果であり、この点についてSVから確認を受けた。以下、加筆した。

(5) M-GTA でなければ見い出せない研究であったかについて。SV の中で本研究が M-GTA での分析でなければならなかった理由を問われた。研究者は家族会でのフィールドワークを実施する中で、苦悩や当事者の症状に振り回される生活を送っているケアラーの中に、自分の趣味を楽しんだり当事者と一定の距離を置いたりして生き生きと生活するケアラーも存在していることに着目した。このケアラーの姿にこそケアラー支援の重要なカギがあるのではないかといった思いが最初の問いである。自分らしく生活しているケアラーは一体どのような人たちとの関係性をもって、どのようなプロセスを経て今のような生活ができるようになったのか。そのプロセスを明らかに出来るのはM−GTAによる分析であると考え、また、その結果を、今後のケアラー支援への実践モデルとして活用していきたいと考えた点に、本研究の分析方法選

定の根拠がある。

5) 分析テーマの絞り込み

発表時:「統合失調症者家族がケアラーとして自分らしい生活を再構築するプロセス」であった。

発表後:「統合失調症者家族が自分らしい生活を再構築するプロセス」とする。

設定の過程

当初、「統合失調症者家族がケアラーとして自分らしい生活を形成するプロセス」としていた。インタビューデータを読み進める中で、例えば「ああ、私は庭いじりが好きだったな～って、思い出したんですよね」といった語りが意味するように、既にある程度組み立てが出来ていたが継続できない事態の発生により、再度組み立て直すこと(家族成員の発症前までにある程度自分らしい生活を構築していたものの、発症と共にこれまで通りの生活は機能しなくなった。その生活を再度、構築していく過程)を意味する再構築が適しているとした。

次に、SV を通して、「ケアラーとして･･･」の表現について、研究者のケアラーに対する役割期待が無意識にも純粋な分析を歪めてしまう可能性があることに気付き、「ケアラーとして」の表現について再考した。SV である平塚先生の的確なご指摘に「統合失調症者のケアラーである家族が自分らしい生活を再構築するプロセス」が適しているのではないかと、研究者の中で考えの揺れを抱きながらも、本研究自体、ケアラー(自覚の有無はさておき、定義としてのケアラー)についての研究であり、(ケアラーとしての自覚の有無にかかわらず)当事者の存在がその人の中に内在化され統合されており、ケアラーとしてのその人らしさとその人自身のその人らしさは切り離せないことから、発表時の分析テーマで発表に臨んだ。発表後、SV での平塚先生からの問い同様の意見を多くの先生方から頂いた。再度、定本(P75-77)を確認し研究者一人では解釈できなかった分析テーマ設定への理解を修正することができた。最終的に、既存の概念を使用しない平易な表現になるよう設定した。

6) 分析焦点者の設定

発表前:「自分らしい生活が送れるようになった統合失調症者家族」

発表後:「統合失調症者を介護する家族」

7) 結果の概要

20 の概念、8 のカテゴリーが生成された。

ストーリーラインのみ提示する。なお、【　】はカテゴリー、〈　〉は概念を示す。

統合失調症者家族がケアラーとして自分らしい生活を再構築するプロセスは【ほどよいケア方法の形成】をターニングポイントとして、そこに至るまでの【ほどよいケア方法の形成】、それ以降の【ケアラーとして新たな自己形成】の 2 つの過程でもって成り立っている。

ケアラーは、【ほどよいケア方法の形成】に至るまでに、受診促進や好転希求の吐露、情報希求行動といった【抱え込むケアからの脱出】が図られると、病気と向き合い知識を得ることや、家族会との繋がりから孤独感や不安が払拭され希望を見出し、病気との共存に腹を括るなど【闘病支援への目覚め】がなされていく。そして、家族成員や専門職者といった【協力者からの支援受諾】をすること、自責の念や自己抑制から解放される【囚われの認知からの赦し】をなすこと、＜自身に内在する偏見受容＞することが相互に関連し合い、ケアラーと当事者にとってバランスが取れたケア方法への進退を何度も繰り返し、対応で

きる感覚を拠り所に【ほどよいケア方法の形成】に至っていく。

そして、ケアラーは【ほどよいケア方法の形成】を契機に、これまで蓋をしてきた自分自身の夢や希望が喚起され、自分のペース配分に基づく生活が再開されるといった【自己尊重した生活の再始動】が図られるようになる。しかし、統合失調症は再燃と寛解を繰り返す慢性疾患であることから【ほどよいケア方法の形成】へ行きつ戻りつつ徐々に【自己尊重した生活の再始動】が確かなものへと移行していく。そして、ケアラーとして当事者との関係を俯瞰できるようになり、距離感のある関係性を再構築しながら、ケア体験を前向きに意味づけ、自分自身の強みとして活用する【ケアラーとしての新たな自己形成】へと至っていく。

SV により修正した一例

・うごきを捉えようとするあまり、「ならでは」な現象を表現出来ていなかった。葛藤を抱く以前のもっと壮絶な体験が存在している。概念は全体的に見直し、ならではな現象と相互作用を再検討していくこととする。修正例〉〈葛藤打破した受診促進〉→〈切迫状況打破の受診促進〉

・【抱え込むケアからの脱出】について。受診ができ、吐露できたことで、【闘病支援への目覚め】に移行するのか。〈切迫状況打破の受診促進〉と〈好転を希求した吐露〉を経て、どのように認識と行動が変化したのか、この変化にこそ、【闘病支援への目覚め】への推進力につながる概念があるのではないか。というご指摘について。→SVのご指摘について、確かに次のカテゴリーに向かうまでに飛躍感があり、違和感をもった。再度、データに戻り検討した。その結果、指摘の通り各概念により生じる認識と行動の変化が見出され、【闘病支援への目覚め】に向かう推進力となるデータがあることに気が付いた。以上のやり取りから、新たに〈肯定的反応に促される情報希求行動〉が生成された。他の概念についても再考しブラッシュアップしていく必要がある。

8）分析を振り返って

・相互作用とうごきを捉えた概念名を生成することに苦戦した。SV を受けうごきは捉えることが出来ているが、相互作用が見えてこないというご指摘を受け、この点を意識し再考した。

・本研究の「ならでは」さについて、SV を通し、意識しデータに立ち返り再考した。意識すると見えてくる「ならでは」さを理解することができ、それにより支援に活用可能な理論が生成できるのだと改めて考えることが出来た。今後、さらにブラッシュアップしていきたい。

・分析焦点者の設定に戸惑った。SV から今後誰に適応させるのかを考えるようアドバイス頂いた。研究者としては、分析焦点者を介してデータを見ることから、「自分らしい生活が出来るようになった統合失調症者家族」を分析焦点者として、自分らしい生活を再構築していくプロセスの理論を生成する目的から「自分らしい生活が出来るようになった」という条件を付与し設定していたが、この条件は研究協力者の範囲とするものなのか迷った。今回、初めの設定のまま報告したが、発表を経て迷いと疑問が解消した。

文献リスト

[1] 厚生労働省．第 13 回地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制の実現に向けた検討会．https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_26149.html 2023.8.16

[2] 甘佐京子.泊祐子．若い統合失調症患者をもつ父母の生活困難度および家族機能.家族看護学研究 2006; 12(1) : 11-21

[3] 藤野成美.山口扶弥．岡村仁．統合失調症患者の家族介護者における介護経験に伴う苦悩.日本看護研究学会雑誌 2009; 32(2): 35-43

[4] 田中いずみ.川中淑恵. 精神科外来に通院する患者を抱える家族の思いの検討. ―生活困難を有する状況で家族が話した内容―. 富山大学看護学会誌 2008; 8(1): 11-20
[5] 木下康仁.「ケアラーという存在」庄司洋子編『シリーズ福祉社会学④ 親密性の福祉社会学 ―ケアが織りなす関係 ―』,2013; 東京大学出版会
[6] 木下康仁編. ケアラー支援の実践モデル,M-GTA モノグラフシリーズ2, ハーベスト社; 2015. 東京
[7] 一般社団法人日本ケアラー連盟. ケアラーとは. https://carersjapan.com/ 2022. 9. 28
[8] 埼玉県 HP.2020.埼玉県ケアラー支援条例 https://www.pref.saitama.lg.jp/a0609/chiikihoukatukea/jourei.html 2022.9.28
[9] 新村出〔編〕. 広辞苑第 7 版.東京:岩波書店, 2018
[10] 木下康仁. M-GTA ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて.2007; 東京:弘文堂
[11] 木下康仁. 定本 M-GTA 実践の理論化をめざす質的研究方法論; 医学書院; 2020. 東京

【第二報告】

石井 あずさ(筑波大学大学院 人間総合科学研究群 看護科学学位プログラム 博士後期課程)
Azusa ISHII : Doctoral Programs in Nursing Science, Degree Programs in Comprehensive Human Sciences,Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba

精神科訪問看護師による初回エピソード精神病者に対する服薬支援のプロセス

The process of medication support by visiting psychiatric nurses for first episode psychosis

1. 発表の過程を通しての感想や学び

この度は、貴重な発表の機会をいただきありがとうございました。長山先生には、限られた時間の中で M-GTA に対する理解を深められるよう、適切で丁寧なご助言をいただきました。また、発表の中でも皆様より非常に有益なご助言をいただき、学びが深まりました。長山先生をはじめ世話人の方々、フロアの方々にも心より感謝申し上げます。

以前より質的研究や M-GTA に興味は抱いていたものの、本格的にこのような研究に取り組むのは初めてで、どのように進めたらよいのか、自分が行っていることは妥当なのかの判断がつかないまま研究に取り組んでいました。このまま進めていても、精度の高い研究にはならないのではと考え、SV や発表を通して学びを深めるため今回定例会に臨みました。発表の過程を通して得られた学びは大きく 2 つあります。

1 つ目は、M-GTA の一つ一つの過程の意味を考えながら分析を進められていなかったことに気づけた点です。例えば、はじめは分析テーマの絞り込みを分析 1 つの手順としてしかとらえておらず、分析テーマを絞り込む理由や意味については考えていませんでした。SV や発表を通し、計画段階で考えていた分析テーマは一旦置いて Grounded on data でテーマを設定し、新たな発見を見逃さないようにするために、分析テーマの絞り込みをしていくことが重要と理解しました。

2 つ目は、自分の思考過程の記録の重要性についてです。SV 前は、理論的メモには事実に基づく記載や自分が重要と判断した内容のみを記載していました。今思うと、ヴァリエーションに対する自分の解釈を記載することを躊躇していたように思います。SV を通して、理論的メモには自分の思考のログすべてを記載することを体験し、自分の解釈が分析にも含まれるということを体験をもって学ぶことができたと思い

ます。同時に、思考のログをすべて記載していくことで、研究の厳密性も担保できることも学びました。

発表自体は緊張しましたが、様々な気づきが得られ発表してよかったと思っています。この研究はまだ分析途中ですが、今回得られた学びを生かしながら分析を進め、分析対象者の方々に届くよう研究を続けていきたいと思います。

2. スーパーバイザーのコメント

長山 豊（金沢医科大学）

石井さんは、精神疾患を患って初期にある人の服薬に対する向き合い方、意思決定に着目されておられます。訪問看護師は、地域で精神疾患を持ちながら服薬への困りごとを抱える当事者に対して、看護という立場で意図的に相互作用を活用しながらどう支援したらよいのか。その問いに対する1つの看護実践のあり方を、M-GTA を用いて分析結果を記述することで応用者に提示することができると考えます。地域で支援する訪問看護師にとって、並びに、病棟で精神疾患を持つ人の地域移行を支援する看護師にとっても、臨床的に応用可能な理論になり得ます。

事前及び当日の SV を通して、重要な論点に挙がったのは、やはり分析テーマの設定です。まず、分析テーマについて考える上で、本研究で何を明らかにしたいのか、という点を明確にすることが大事です。当初の研究テーマは「精神科訪問看護師による初回エピソード精神病者に対する服薬支援のプロセス」とされており、抽象度が高く、研究テーマが意味する服薬支援とは、どういう側面に焦点をあてたものなのかが分かりにくく感じました。本研究で明らかにしたいことについて SV を繰り返す中で、石井さんにできるだけ言語化してもらいました。訪問看護師は精神疾患を持つ人自身が、自ら内服している薬剤について理解を深め、ご自身が主体的に判断して意思決定できるように支援している側面があり、石井さんはその支援プロセスに強く関心を表現されるようになりました。石井さんは、訪問看護師が当事者である利用者との相互作用において、病棟での服薬管理とは異なる特性を秘めたアプローチが存在していると気づいていました。この研究では、訪問看護師による服薬の自己決定支援のあり様を理論構築によって可視化したいと考えられたのだと感じました。研究で明らかにしたい現象について、データ収集を終えて分析に臨もうとする段階でも、改めて自分の言葉で具体的に他者に説明しようとすることで、研究の問いとしての曖昧さに気づくことができます。石井さんは、真摯にデータと向き合い、自分の言葉で積極的に研究としての問いを説明しようと試みておられ、徐々に明確化・具体化されていきました。

研究テーマが明確になりつつある段階で、現時点では、分析テーマを研究テーマと同様に「服薬に関する自己決定を支えるプロセス」とされています。grounded on data の分析を通して、この分析テーマでデータのプロセス性を本当に捉えきれているのか、常に再考しながらデータと向き合うことをお勧めします。「意思決定」や「自己決定」という行為は精神保健医療福祉領域において非常に重視されていますが、この行為には多様な要素が含まれた概念でもあります。病棟で「患者」として入院している段階とは異なり、地域ではすでに精神疾患を持つ人が自己判断で服薬行動を意思決定しています。精神疾患を持つ人自身が服薬に対してどのように捉えるのか、どのように感じるかによって、服薬行動に大きく影響を与えます。相互作用の相手も幅広く、処方の裁量権を持つ主治医の考え方・説明の仕方、訪問看護師の服薬支援に関する捉え方・価値観・ケア方法、薬剤師など多職種から受ける服薬支援、共に暮らす家族などの重要他者の服薬に関する考え方やサポートなど、多様な立場の人との相互作用に影響を受けています。今回の研究では、精神科訪問看護師と精神疾患を持つ人との相互作用を軸にして、服薬に関する様々な感情や認識、その影響要因を共有しながら、精神疾患を持つ人が服薬に対する自分の捉え方や

考え方を見つめ直し、薬との付き合い方を構築していくプロセスでもあると考えます。自己決定には変わりないのですが、その言葉の背後に隠れている相互作用の意味を、データの中から読み取り、丁寧に解釈を続けていく中で、より grounded on data に基づく分析テーマに洗練されていきます。

石井さんのご研究は、地域で支援に従事する訪問看護師の服薬に関する看護実践の質の向上に必ず寄与すると思います。今後、分析を進めて、データに根ざした理論を構築されることを心から応援しています。

3. 研究の概要

1) 研究背景

初回エピソード精神病とは、生涯で初めて臨床閾値以上の精神病症状（幻覚や妄想などの陽性症状）が 1 週間以上継続している状態である（水野ら，2017)。診断名としては、統合失調症、統合失調感情障害、統合失調様障害、急性一過性精神病等が含まれるが、症状の種類や持続期間などにより診断が不確定となることが多い。このような診断名が不確定な時期であっても、発症早期からの治療や支援により予後が良好になることが明らかにされ(Correll et al., 2018)、諸外国では精神病に対する早期介入が推し進められている(水野ら，2017)。しかしながら、日本では精神病に対する早期介入の重要性に関する認識は広まりつつあるものの、実践レベルでは広く浸透はしていない(水野ら，2017)。

服薬アドヒアランス不良は、初回エピソード精神病者における最もリスクが高い再発要因であり(Alvarez-Jimenez et al., 2012)、薬物療法開始から 1 年以内に一定数の初回エピソード精神病者が服薬アドヒアランス不良となることが明らかにされている(Coldham et al.,2003 など)。このような服薬アドヒアランス不良に対処するため、看護師は重要な役割を担っている。看護師は服薬アドヒアランスの評価と介入の双方を行う役割があり(NICE, 2009)、国内外のガイドラインやマニュアルには、服薬支援における看護師の様々な役割や具体的な戦略が明示されている。さらに、英国国立薬学会は 1997 年に患者と医療者従事者の関係性という視点から服薬行動に関する概念として、コンコーダンスを提唱している。コンコーダンスは、現実的な期待に基づいた患者と医療従事者間の同盟関係の発展を意味するものである(Bissonnette, 2009)。患者と医療従事者が交渉と意思決定の共有のプロセスを経て、治療計画に到達することを示し、たとえ医療従事者の同意がなくとも、患者には服薬中断などの意思決定をする権利があることを強調している(Gray et al, 2002)。初回エピソード精神病者に対する心理社会的介入のマニュアルにおいても、医療従事者は服薬における自己決定ができることを患者に伝えることが示されている(Gleeson et al. 2013)。

このように様々な服薬支援におけるガイドラインが存在する一方で、精神科訪問看護師による内服薬セットや内服確認の実施状況は 80%を超えているものの、薬物療法の必要性の説明率は 30%を切り、服薬への思いや考えなどの傾聴の実施率は 9%を下回っている(山下ら，2016)。このような報告からは、精神科看護師による服薬支援は十分に実施されていない可能性が考えられる。一方で、精神科看護師は服薬自己管理の必要性を認識しながらも、患者の状態を考慮すると実施が難しいと感じており(田端ら，2017)、熟練訪問看護師であっても、服薬確認の重要性を認識しつつ、統合失調症者との関係の悪化を懸念し、薬についての質問はあえてしないことも示されている(平松ら，2018)。つまり、精神科看護師による服薬支援の背景には、様々な困難さやこれに基づく判断の下に、看護師と患者の相互作用が行われている可能性が考えられる。しかしながら、初回エピソード精神病者に対して精神科訪問看護師がどのように服薬における自己決定を支えているのかは明らかにされていない。

2) 本研究の目的

精神科訪問看護師による初回エピソード精神病者の服薬における自己決定を支えるプロセスを記述すること

3) M-GTA に適した研究であるかどうか

木下(2007)は以下の 4 点を M-GTA に適した研究の特性としている。

(1) 実践的な領域：健康問題や生活問題を抱えた人々に専門的に援助を提供するヒューマン・サービス領域

→精神科訪問看護師が初回エピソード精神病者の服薬における自己決定を支えるという、ヒューマン・サービス領域の研究である。

(2) サービスが行為として提供され、利用者も行為で反応する直接的やりとり(社会的相互作用)のレベル

→精神科訪問看護師による初回エピソード精神病者の服薬における自己決定を支える援助が行為として提供され、初回エピソード精神病者も行為で反応する直接的やりとり（社会的相互作用）がある。

(3) 現実に問題となっている現象で、研究結果がその解決や改善に向けて実践的に活用されることが期待されている場合

→初回エピソード精神病者の服薬における自己決定を支える援助への応用を視野に置く研究である。

(4) 研究対象自体がプロセス的特性をもっている場合

→精神科訪問看護師が初回エピソード精神病者の服薬における自己決定を支えるプロセスに着目している。

以上より、本研究は M-GTA に適した研究であると考えられる。

4) 分析テーマへの絞込み

(0)「精神科看護師による初回エピソード精神病者に対する服薬支援の促進・阻害要因」2023.4

本研究では、計画・データ収集時「精神科看護師による初回エピソード精神病者に対する服薬支援の促進・阻害要因」というテーマで内容分析・テーマ分析を実施する予定であった。上記は、研究計画・データ収集時のテーマである。

(1)「精神科訪問看護師による初回エピソード精神病者に対する服薬支援のプロセス」2023.5

M-GTA に適した研究の特性に当てはまっているのではないかと考え、M-GTA に切り替え分析を開始した。また、病棟看護師の参加はなく訪問看護師のみが対象となったため、「精神科看護師」→「精神科訪問看護師」とし文脈を「訪問看護」に限定した。

(2)「精神科訪問看護師が初回エピソード精神病者の服薬に関する意思決定を支えるプロセス」20231002

SV で分析テーマの絞りこみができていないと指導を受け、分析テーマを再考した。SV を通し、精神科訪問看護師が初回エピソード精神病者の服薬に関する意思決定を支える援助に関しては、社会的相互作用についてのプロセス性があるのではないかと考えた。Grounded on data を意識し、まずは中心となるような 1 事例の語りを通して分析テーマを検討した。

(3)「精神科訪問看護師が初回エピソード精神病者の服薬に関する自己決定を支えるプロセス」20231002

SV で「意思決定」という言葉は広く、終着点が見えにくいというご助言をいただき、データを見直しながら上記分析テーマを設定した。

5) 分析焦点者の設定

初回エピソード精神病者に対する服薬支援の経験がある訪問看護師

6) 結果の概要

初めは概念「タイミングを見計らう」などの概念が 35 個生成された。SV を通して「情報と患者自身の状態を照らし合わせる」という概念を 1 つ生成した。

7) SV を受けての変更点

(1) 分析テーマの変更、研究テーマの変更

分析テーマの絞り込みができていないため、まず中心となるような事例 1 例について分析を進め、その上で研究目的・テーマの変更も検討した。(6.分析テーマの絞り込み参照)

(2) 概念生成、理論的メモの修正

特徴的な 1 つの事例について検討し概念生成ができていなかったため、SV を通して実施した。その際、理論的メモについても修正をした。SV 前は、理論的メモにヴァリエーションと概念の整合性や概念同士の類似性・対極性などについて検討した過程を記載していた。SV 後は、理論的メモにヴァリエーションが表現していること、ヴァリエーションが意味していること、分析焦点者がとった行動の意図や理由、定義から考えられる対極例、作成した概念と関連がありそうな動きについてなど、考えたことすべてを記載した。

8) 分析を振り返って

- <u>理解できた点</u>
  - 分類型思考と生成型思考の違い：生成型思考では得られたデータ以外のヴァリエーションについても検討をし、概念に含まれるように分析をする
  - M-GTA におけるプロセスが示す意味：社会的相互作用の動き
  - 分析テーマの絞り込みの方法：まずは、得られた 1 事例のデータについて深く考察しながら分析テーマを絞りこんでいく
  - 分析ワークシートの使い方、記載する内容
- <u>悩んでいる点</u>
  - 概念名や定義に具体性やオリジナリティが薄い
  - 研究テーマと分析テーマの設定

≪文献リスト≫

Alvarez-Jimenez, M., Priede, A., Hetrick, S. E., Bendall, S., Killackey, E., Parker, A. G., McGorry, P. D., & Gleeson, J. F. (2012). Risk factors for relapse following treatment for first episode psychosis: A systematic review and meta-analysis of longitudinal studies. *Schizophrenia Research, 139*(1-3), 116-128. 10.1016 / j.schres.2012.05.007

Bissonnette, J. M. (2008). Adherence: A concept analysis. Journal of Advanced Nursing, 63(6), 634-643.

Coldham, E. L., Addington, J., & Addington, D. (2002). Medication adherence of individuals with a first episode of psychosis. *Acta Psychiatrica Scandinavica, 106*(4), 286-290. 10.1034/j.1600-0447.2002.02437.x

Correll, C. U., Galling, B., Pawar, A., Krivko, A., Bonetto, C., Ruggeri, M., Craig, T. J., Nordentoft, M., Srihari, V. H., Guloksuz, S., Hui, C. L. M., Chen, E. Y. H., Valencia, M., Juarez, F., Robinson, D. G., Schooler, N. R., Brunette, M. F., Mueser, K. T., Rosenheck, R. A., . . . Kane, J. M. (2018). Comparison of Early Intervention Services vs Treatment as Usual for Early-Phase Psychosis A Systematic Review, Meta-analysis, and Meta-regression. *Jama Psychiatry, 75*(6), 555-565. 10.1001 / jamapsychiatry. 2018.0623

Gleeson, J. F. M., Cotton, S. M., Alvarez-Jimenez, M., Wade, D., Gee, D., Crisp, K., . . . McGorry, P. D. (2013). A randomized controlled trial of relapse prevention therapy for first-episode psychosis patients: Outcome at 30-month follow-up. Schizophrenia Bulletin, 39(2), 436-448. doi:10.1093/schbul/sbr165

Gray, R., Wykes, T., & Gournay, K. (2002). From compliance to concordance: A review of the literature on interventions to enhance compliance with antipsychotic medication. Journal of Psychiatric and Mental Health Nursing, 9(3), 277-284. doi:10.1046/j.1365-2850.2002.00474.x

平松悦子,難波峰子,木村美智子. (2019). 熟練精神科訪問看護師が統合失調症者に対して実践する臨床判断. 日本精神保健看護学会誌, 28(2), 20-29. http://search.jamas.or.jp/link/ui/2020121373

木下康仁. (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂.

木下康仁. (2020). 定本 M-GTA-実践の理論家をめざす質的研究方法論. 医学書院.

水野雅文. (2013). 統合失調症の包括的治療 地域支援と早期介入. 日本サイコセラピー学会雑誌, 14(1), 5-10.

Nakanishi, M., Nakanishi, M., Niimura, J., & Asukai, N. (2015). Association between length of hospital stay and implementation of discharge planning in acute psychiatric inpatients in Japan. *International Journal of Mental Health Systems, 9*(1)

田端一成,菅谷智一,沼尻信子,森千鶴. (2018). 精神科救急病棟における統合失調症者の服薬自己管理導入に対する看護師の認識. 看護教育研究学会誌, 10(1), 41-49. http://search.jamas.or.jp/link/ui/2018378638

山下真裕子,藪田歩,伊関繁男. (2016). 地域で暮らす精神障がい者の訪問看護師による服薬支援の現状と課題. 日本精神保健看護学会誌, 25(1), 99-107. http://search.jamas.or.jp/link/ui/2016338959

【第三報告】

矢島 厚子（2 級キャリアコンサルティング技能士（国家資格）/法政大学大学院 博士後期課程満期退学）

Atsuko YAJIMA：2nd grade Certified Skilled Professional of Career Consulting, Completed Ph.D. program without a Ph.D. degree, Hosei Graduate School

日本企業における海外派遣からの帰任者の組織再適応プロセスに関する研究

A Study on the Organizational Readjustment Process of Returnees from Overseas Assignments of Japanese Company

1．発表の過程を通しての感想や学び

この度は貴重な発表の機会をいただきまして、誠にありがとうございました。発表の場で親身なコメントや示唆に富んだアドバイスをいただきましたことを心より感謝申し上げます。この機会をいただけたことで分析を再考する重要な機会となりました。特に分析テーマの絞り込みに関してのご質問をいただいたこと

で、その重要性を理解することができました。

当日のご質問やアドバイスとそこからの学びは以下のようなポイントになります。

会場からいただいたご質問・コメントと学び

(1)分析テーマ

帰任後の再適応という表現はどういう状況を示すのか、再考して分析テーマにした方が良いのでは、葛藤を克服や工夫していくような視点はなかったのかという問いをいただいた。また、再適応では戻ってきて乱れたものを何とか整え直したという、成長とは違うものに見えてしまうが、新しい役割を付与され担っていくなどポジティブな意味合いも捉えようとしているのかなど問い掛けをいただいた。海外帰任後の研究では課題点が指摘されることが多いため、コメントでいただいた日本の組織を変えられる工夫をしているかもしれないという視点からも、改めて分析テーマの再検討の必要性を感じた。世界から見ていく感覚はこれからの企業にとても求められるものであることから、最終的に海外赴任が対象者にとって役に立ったのかという点について対象者に問うことについてコメントをいただき、新しい形で戻っているということについて発揮できている点を再度インタビューにて確認し、再適応だけでない可能性を検討する。

(2)分析焦点者

インタビュー対象者であった日系製造業の技術者を意識してきたが、実際に応用する時にどういう人に応用できるのかという問いをいただき、対象範囲を限定して検討していたことやその範囲であるというあきらめを持っていることに気づいた。帰任した様々な業種の人に活用できるのであればここに製造業の技術者を入れる必要はないと思うがどうかという問いからも、まずは幅広く対象になりえることを念頭に今一度視点を拡げて検討を行う。また、日系製造業技術者特有の観点がデータとして現れているのかどうかも同時に検証を行う。

(3)概念の生成

実際のデータの部分だけからでは解釈が難しい点や共通するような概念がつくられていることをご指摘いただいたことから、SVで理解したワークシートの活用の仕方で改めて概念を見直し、専門領域では当然として考えてしまい見落としがちな点を、語りのデータの原点に戻りながら再度確認を行う。またアイデンティティのゆらぎという観点からも考察を検討する。

(4)カテゴリーの生成

カテゴリーの収束について、アイデンティのゆらぎがいろいろなところに見えている点を意識してカテゴリーを作った方がよいというご指摘から、本研究はアイデンティティにも言及するようなうごきが生じている点について、改めて核心に触れることができた。アイデンティティは非常に重要且つ難しい概念であるため、丁寧に検討を重ねる必要があると考えるが、個人が組織の一員である成員性という観点から対象者のアイデンティフィケーションについての検討を行っているため、引き続き今回の分析結果との関係性を検討していきたい。

SVをご担当いただきました隅谷先生には、お忙しい中、発表資料内容・分析の具体的な進め方等について、大変丁寧にご指導いただきました。改めまして感謝申し上げます。今回初めて本格的なSVを経験させていただきましたが、先生のSVにより凝り固まった目線や立ち位置を見直すことで、自分だけでは気づけない視点や発見にたどりつき、その発見により更なる探求意欲へとつながったことからSVの効果と重要性を理解しました。そして、更にデータに真摯に向き合うことにより、データが語ってくる何かを形にし

たいという想いにつながっております。最後に木下先生がお示し下さいました「面白さ」というのはこういうことではないかと少しですが触れられたのではないかと感じており、今後もM-GTA研究会を通して更なる学びを続けてまいります。

2. スーパーバイザーのコメント

隅谷 理子（大正大学）

矢島さんは、大手企業の人事部の仕事を通して、海外帰任者に関する人材教育の問題意識を持たれ、博士後期課程において調査研究を続けてきた方です。そのため、人事としての立場としての役割・問題意識も明確にあり、人材教育に関する興味関心、使命感を持って研究に取り組まれてきたことが、SVを通しても強く伝わってまいりました。

本研究は、すでに学会誌への原著論文として投稿がされた段階でしたが、博士論文を執筆するうえで、もう一度本格的に分析を見直したい、博士論文の一部としてふさわしい記述をもう一度再考したいというモチベーションで、発表にエントリーされました。

矢島さんの取り組む研究は、グローバルで実績を積んだ人材を帰任後にいかに企業の将来へ活かしていけるのか、また、その人材がどのような使命をもって日本の産業を支えていくのか、今後の日本の企業が取り組むべき内容であるし、産業活性化への示唆への可能性を含んでいます。そして、実際に調査された海外帰任者集団のひとりひとりのデータは非常に貴重で、将来の可能性に満ちた人材が、日本に帰任された後の現実を通して葛藤的な体験をし、そのような中でもそれぞれの使命感・価値観をもって取り組む姿勢が表れているデータでした。

矢島さんはインタビューを通して、海外帰任者の葛藤にアクセスし、データの発見がしっかりあったように思います。しかし、その一方で、SV・発表を通して感じたこととつながりますが、その表現が、人事部としての見方（例えば、分析テーマにおける「再適応」という表現の選択など）にとらわれてしまい、グラウンデッドなデータの見方をもう一歩、深められる余地が残りました。分析テーマを再適応とすると、海外での経験を得て、次へ活かしていこうとする、協力者自身の新たな方向への心の動きの表現弱めてしまうという側面があり、再適応と設定してしまうことの限界を学びました。また、SV でも発表でも話題に上がったことで非常に印象的だったのは、協力者の象徴的な発言であった「日本人化」というデータです。それらの語りは大変面白く、矢島さん自身も着目をしていました。日本人化ということは、海外の体験を通して日本人としてのアイデンティティに変化があったからこそであり、日本に帰任後の“日本人化”の現象の語りになったのだと思います。それらの動きがストーリーラインや結果図に表れると、M-GTA で分析し、記述する面白さにつながり、矢島さんが取り組まれる調査の考察、主張が活き活きと表現できるのではないかと思いました。

以上が、矢島さんとのSV・発表を通じて、私自身も共に学んだことでした。木下先生が研究会の最後におっしゃっていましたが、調査から何かひとつでも新たな発見があったか、という視点が重要だということを、私自身も、改めて学ぶことができました。その発見はすでに矢島さん自身はすでにされていました。その点を M-GTA の分析・表現をさらに深めることができたら最高だと思います。非常に意義深い研究に取り組まれていると思いますので、博士論文の一部として、納得したものになりますよう、心から願っています。

3. 研究の概要

1）研究の社会的背景

海外へ市場拡大を行う日系企業にとっては、現地で直接的に業務を遂行する日本人駐在員の海外派遣は重要な企業戦略である。このため、日系企業は日本人駐在員が不可欠と考えており、コロナの影響は生じていない（「第12回日系企業における経営のグローバル化に関するアンケート」㈳日本在外企業）。海外派遣者はコロナ禍では大幅に減少したが、コロナ前の 2018 年と比較し 2022 年は増加傾向に戻っている（出入国在留管理庁　出入国在留管理統計）。従業員の海外赴任経験は企業の経営人材の育成という観点でも重要で、海外への派遣は業務遂行による活躍と共に、経営リーダー人材育成の修羅場経験としても活用されている（経済産業省，2017）。

一方で、海外派遣からの帰任者が海外で学んだ知識や経験は暗黙知であり、周りから正しく認識されにくいとされている(Antal, 2001)。このため帰任者が、帰任後派遣元組織で勤務する上での適応問題がしばしば指摘されている（Black ら，1999；内藤，2012）。IT技術が進みコミュニケーションが容易になった現在においても、逆カルチャーショックは変わらず生じており、特に、海外から帰任した際は、赴任以前とは異なる価値観・行動様式・アイデンティティを身につけたことにより、元の職場に戻っても以前のように業務を行うことは簡単ではない(Adler，1981)。このように海外からの帰任者は、所属組織や赴任者さえも本人の変化を捉えられず帰任時は行く前の状態として認知されアップデートされていない可能性がある。しかし、帰任者は海外赴任する数年よりも帰任してから就労する年月の方が長いため、帰任時の変化を認識することは組織と個人の関係性において重要である。

なお、言葉の定義として海外駐在は自身が所属する日本国内の企業から、海外の子会社や関連会社に、（在籍）出向又は転籍し、現地で働く従業員を示す。海外派遣は企業側から見た視点、海外赴任は対象者から見た視点である。また、基本は企業からの命により帰任を前提とした派遣であり、海外で平均3－5 年勤務する。特に製造業の技術者の場合は、その職種特性から帰任後はほとんどの場合赴任前の組織へと戻る。

2）目的

海外派遣からの帰任後、帰任者が元の日本の組織で業務遂行する中でどのような変化が生じており、組織へ再適応していくのかを探索する。帰任後、日本の組織で業務遂行を行う中での意識変容プロセスを明らかにすることが目的である。海外派遣より帰任した 10 名の日系製造業の技術者に対する半構造化面接を行い，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより「帰任後、日本の組織で業務遂行を行う課程において、どのように仕事や組織の捉え方が変容していくのか」を探索的に分析する。

研究テーマとしては、日本企業における海外派遣からの帰任者の組織再適応プロセスに関する研究である。海外派遣から帰任した製造業の技術者を対象として「技術者が帰任後派遣元の組織とどのような関わりを持ち、どのような影響を受けてきたのか」そのプロセスについてインタビューを行うことにより、帰任時の周囲との関わりを中心とした『派遣元組織へ再適応していく意識変容プロセス』について明らかにし、「帰任者には何が生じているのか」「帰任した組織からどのような影響を受けているのか」について質的に検討することを目的とした。以上のことから、海外派遣から帰任した技術者を対象としてインタビューを行い、得られたデータに関して分析した。

3）M-GTA に適した研究であるか

本研究では、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を採用した。M-GTA が適している研究は、第一に人間と人間が直接的にやり取りする社会的相互作用に関わる研究であること、第二に研

究結果としてまとめられた理論が実践現場で能動的に応用されるものであること、第三に研究対象とする現象がプロセス的性格をもっていること、という3点の特徴を持つものである（木下，2007）。そのため、本研究は以下の点から、M-GTAが最適であると考えた。

(1) 帰任者と帰任後の日本組織の社員との社会的相互作用をとらえようとしている

本研究で対象とする海外派遣からの帰任者は、派遣前と同じ日本の組織の人と関わりながらその組織内で業務を行う。組織を構成するのは従業員一人一人である。このため本研究は、帰任者と派遣元である日本の組織の従業員との社会的相互作用を捉えようとするものである。

(2) 理論を生成し、実践的活用を目指している

本研究は「海外派遣からの帰任者が帰任後の日本組織に再適応していくプロセス」についての理論を生成し、派遣元である日本の組織の人事・上司・同僚・部下・後輩、当事者等によって、能動的に応用され、検証されていく可能性があると考えられる。

(3) 研究しようとしている現象がプロセス的性格を持つ

本研究で明らかにしようとする「帰任者が帰任組織に再適応していくプロセス」は、帰任者が帰任した組織で就業していく上での帰任経験に対する自分なりの意味付けをし、日本の組織に戻って仕事をしていくというプロセス的性格をもつものであると考えられる。

4）分析テーマへの絞り込み

『海外派遣からの帰任者が日本の組織に再適応していくプロセス』とした。

初めは「海外派遣からの帰任者の組織再適応における経験学習プロセス」としたが、インタビュー内容に経験に関する文脈があまりなかった。

5）分析焦点者

『海外派遣から帰任して日本で業務を行う製造業の技術者』とした。

6）結果図

（SV前）

プロセスを意識して「海外赴任前と違和感を覚えた時」を始点「違和感や葛藤に折り合いがついた時」を終点として分析していた。対象者の話の中では大きく「仕事の進め方」「葛藤」「組織との関係」に分かれたが、「仕事の進め方」「組織との関係」の中に「葛藤」があると感じその部分を分けることにしたが「葛藤」の部分の取り扱いについて悩んでいた。その後まずはその分類の中で概念とカテゴリーを並べ、概念間・カテゴリー間の関係性を見たがうまくつながりを示すことができていなかった。流れを『帰任後の時間経過（葛藤対応プロセス）』と捉え「内省中」「学習中」「変化中」としたが「違和感の認知」「現状との調整」「違和感の統合」に変更した。仕事の進め方については始まりを【海外赴任前と何かが違うと感じる】のところからとし、終わりを【別感覚を調整し業務を行う】とした。また、組織との関係性は【日本の組織への違和感】のところからとし、終わりを【自分の所属を再定義】とした。

（SV後）

コアカテゴリーに注目して全体の分析を再度見直した。特に悩んでいた「葛藤」の部分を見ていったところ、帰任後、何かが違う感じはしているが対象者はそれが何なのかを気づくことなく行動をしている。その行動や周囲の反応の中で、自分が周りと違うことを感じることから葛藤が始まっている。葛藤が始まると

自分が感じていた違和感を意識化することができる。その違和感を意識的に解消するため、海外赴任前の感覚に戻したくないことや海外で得た感覚による自分の新たな価値観を大切にしたいため周囲への抵抗や合わせるふりをすることを繰り返す。繰り返す段階で学習も生じるており、少しずつ自己矛盾を統合していく。統合されると組織との関係性に折り合いがつき、新しい立ち位置を意味づけすることができる。これにより「無意識な違和感」「葛藤による違和感の意識化」「矛盾の統合」とした。

7）SV を受けての変更点

・結果図

「葛藤」の部分が気になっていることから、コアカテゴリーに注目して再度全体を抜本的に見直した。この結果、心のうごきを捉えられるようになったが、まだコアカテゴリーが複数あり、カテゴリーに分類できない概念も存在するため、概念についても更なる検討を行っていく。また、改めてSV 前の図においては、カテゴリー・概念を並べているのに近い状態であったことが理解できたため、SVによりデータを離れて確認を行う中で説明ができるのかという点を確認し、再度データに戻って確認を行うことを知り、視座が変わり、結果図にうごきが見えるようなったことは大きな学びとなった。

・分析ワークシート

理論的メモの使い方が十分でなかった。それまではそこから読み取れる解釈を記載していたに過ぎなかったが、今回は概念の見直し時に、何度も変更してきた概念について、変更時の理由や分析時の考えや対局例などのつながりを丁寧に記載して再度修正を行った。これにより概念を変更するプロセスの中で、語りからの本当の意味合いを生成することにつながった。また、概念の説明の際に「日本人化」という語りについて問いをいただき、あまり意識していなかったが重要な言葉であることに気づき概念の表現に含めた。SV がなかったら重要な概念が埋没したままであった。ここからアイデンティティに言及するようなうごきが起きているのではないかと考えるまでに至った。

8）分析を振り返って

・日本人化をキーワード入れたことにより、対象者が日本に合わせていくことはこの日本の社会でうまくやっていくために必要と感じており、一方で、それでも変えたい、何かの役に立てたいという想いをその人なりにどんな風に生かしているのかを考えることが重要であることがわかってきた。この点をアイデンティティのゆらぎとして博士論文の論述に展開していきたい。

・分析テーマの絞り込みがいかに重要で難しいかということを実感した。特に、自分の専門分野からの視点からテーマを見ていくことは、その時点で限定された見方から開始しているということを学んだ。このためSV以前は想定内の結果以上の新しさや驚きを感じることがなかったが、SVを受けたことで、自分の専門分野の枠を超えた視点での問いが自らの準拠枠を問い直すきっかけとなり、新たな視点からの発見や更なる探求の意欲へとつながった。

9）主な引用文献

Adler, N. J.（1981）“Reentry: Managing Cross-Cultural Transitions” Group and Organization Studies, 6, 341-356.

Antal, A. B. (2001) Expatriates' Contributions to Organizational Learning1. Journal of General Management, 26(4), 62-84.

Black, J. S., Gregersen, H. B., Mendenhall, M. E., and Stroh, L.K.（1999）Globalizing People through

International Assignments, Massachusetts: Addison-Wesley,（白木三秀，永井裕久，梅澤隆 監訳(2001)『海外派遣とグローバルビジネス：異文化マネジメント戦略』白桃書房）。
木下康仁.（2020)『定本 M-GTA: 実践の理論化をめざす質的研究方法論』医学書院。
木下康仁.（2007)『ライブ講義M-GTA―実践的質的研究法　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂。
内藤陽子（2012)「海外派遣帰任者のキャリア・マネジメント 帰国者一般についての議論から企業組織でのマネジメントの議論まで 」組織学会大会論文集，1(2)，38-51.

【参加者の感想】

定例研究会後のアンケート調査「今回の定例研究会についての感想」から掲載しています。

・コア概念が何なのか、どの概念を中心に結果図を描くのかなど、どの発表からも学びがありました。ありがとうございました。

・木下先生も最後におっしゃっていたように、分析テーマの重要性を痛感しました。また、分析テーマと分析焦点者から応用できる射程を限定すると共に、その研究ー分析テーマだからこそ見えてくるものを意識しようと思いました。

・初めて参加させていただきました。個人で学習しており、わからないところもあったのですが、皆さまの発表内容や先生方のコメントで大変勉強になりました。これからの分析の参考にさせていただきます。

◇近況報告

(1) 氏名	(2) 所属	(3) 領域	(4) キーワード	(5)内容

(1) 阿比留　典子

(2) 西南学院大学大学院人間科学研究科博士後期課程・済生会福岡総合病院がん相談支援センター

(3) 医療ソーシャルワーク、高齢者福祉

(4) アドバンス・ケア・プランニング、エンド・オブ・ライフ、QOL

(5) 総合病院の医療ソーシャルワーカーで、博士後期課程に在籍しております。10/14 の定例研究会へzoomで参加させていただいたさいに、M-GTA の大原則である”grounded on data”という言葉の重みを強く感じ、学びを深めたいと思い、入会させていただきました。どうぞよろしくご指導をおねがいいたします。

◇次回のお知らせ

○第 100 回定例研究会

日時：2024 年 2 月 10 日（土）13:00～
会場：オンライン

◇編集後記

今回は 99 回目の定例研究会でした。次回は、なんと 100 回目の定例研究会です。アニバーサリーではありますが、私の想像では、特別なことはなく、分析テーマの絞り込み、grounded-on-data、「ならでは」など、M-GTA という方法におけるキーワードが飛び交う研究会となると思います。方法をしっかり身につけ、使えるようにするには、繰り返しが不可欠だと思います。100 回目も 101 回目も、その先も、ご一緒に学んでいきましょう。（丹野ひろみ）

世話人：阿部正子、今井朋子、小沼聖治、唐田順子、菊地真実、岸田泰則、倉田貞美、坂本智代枝、佐川佳南枝、隅谷理子、竹下 浩、丹野ひろみ、都丸けい子、長山 豊、根本愛子、畑中大路、林 葉子、平塚 克洋、宮崎貴久子、山崎浩司、McDonald, Darren （五十音順）

相談役：小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾 （五十音順）

編集・発行：M-GTA 研究会
研究会のホームページ：https://m-gta.jp
問合せ先：研究会事務局アドレス office@m-gta.jp